

宗教儀礼としてのリンチと死の意義の解釈
—アメリカにおける公共と暴力—

**Lynching Festivity and Meanings in Death:
Public and Violence in America**

木村 武史
KIMURA Takeshi

筑波大学地域研究 第38号 別刷

平成29年3月

筑波大学人文社会科学研究科
国際地域研究専攻

宗教儀礼としてのリンチと死の意義の解釈 —アメリカにおける公共と暴力—

Lynching Festivity and Meanings in Death: Public and Violence in America

木村 武史
KIMURA Takeshi

Abstract

Even after Emancipation, many African Americans endured daily harassment and violence especially in the South. A recent study also shows that during the same period of time, many young African Americans became forced prison laborers institutionally imposed by state government, local police and major companies such as US Steel. During the same period of time, they were targeted as an object of white lynching. There are many studies of the economic, social, political and cultural contexts of the lynching death, but only a few studies have paid a serious attention to its religious dimensions. This paper examines religious (Christian), festive and sexual-mythic dimensions of the public lynching death of African Americans based upon the studies by American scholars such as Donald Mathews, Amy L. Wood and others. At the same time, it points out the limitation of these approaches focusing upon the actions of the white supremacists as the location of making meanings since they could not explore into the dimensions of pain, agony and desperation of lynched African Americans. At the end, it raises an issue of how to recover the significance of the lynched death of the African Americans as the location of the public body and the historic form of terror.

Key Words : America, Lynching, Festivity, Spectators, Public
キーワード：アメリカ、リンチ、祝祭儀礼、観客、公共

1. はじめに

本論では、黒人の解放の神学者ジェームズ・H・コーンの著作『十字架とリンチの木』に触発され (Cone 2013, Kimura 2015)、アラバマ州の「公正な正義のイニシアチブ (Equal Justice Initiative、以下EJI)」が2015年に公表した報告書等を参照しながら (EJI 2015)、宗教的問題としてのリンチをアメリカにおける公共と暴力の問題として考えてみることにしたい。しかし、リンチを宗教学的問題として捉えることに異を唱える研究者もいると思われる。そのような立場に対しては、一つには、コーンは白人神学者が人種差別問題を社会的問題としては認めるが、神学的

課題としては認めないと批判している観点から応答できる。もう一つには、ルネ・ジラルの『暴力と聖なるもの』以来、暴力が重要な課題としても取り上げられてきているが、ここ数年、アメリカにおける宗教研究において祝祭儀礼という観点でリンチをとらえようとする研究がある。確かにそれは白人至上主義の白人にとっての祝祭儀礼にしか過ぎず、アフリカ系アメリカ人（以下、字数の関係で黒人という表記をするが、特に差別的な用語として用いるのではない。「白人」の対照として「黒人」という表記を用いる。）にとっては「恐怖のリンチ」以外の何物でもなかったのであるが、リンチに宗教的側面を見出そうという視点は重要である。

また、本論では、宗教学の問題としてリンチと公共との関係を問題とするが、それは市民宗教論や公共宗教論に関連する公共とは異なる問題である（Casanova 1994；藤本 2009）。当時のアメリカ社会の政治的・宗教的価値を是認するような社会制度（行政、裁判所、教会）などから逸脱した時空間で行われた暴力であるので、そのような特質をもつリンチを公共と結びつけるには概念の混乱があるとも思われるが、他方、そのような枠から逸脱しながらもリンチの場で表出していたのは多数派で支配層の白人社会の公共的価値そのものでもあったといえる。しかも、本論で論ずるように、リンチという暴力において噴出する宗教性は、デノミネーションとしてのキリスト教や市民宗教といった種類のものとは質的に異なる要素を含んでいたと考えられる。

南北戦争以降、南部ではジム・クロー法などによる人種隔離政策や投票妨害などがあり、奴隷解放宣言以降も黒人に対する差別が続いていたことは知られている。しかし、最近では、南北戦争以降でも新しい呼び名での奴隷制は存続したというダグラス・A・ブラックモンの研究や（Blackmon 2008）、あるいは、キダダ・ウィリアムズが述べたような「奴隷解放の恐怖（Terror of Emancipation）」という社会状況が生まれたといえる（Williams 2012：17）。一般的なアメリカ宗教史では、1940年代まではソーシャル・ゴスペル運動や至福千年運動、あるいはファンメンタリズムが活発になった時代でもあるが、白人による黒人に対する暴力という観点からは歴史の恐怖である「リンチの時代」ともいえる（Eliade 1971）。そして、リンチに宗教的側面があるとすれば、従来の宗教史には決定的に欠けていた側面があるといえる。また、最近の研究によれば、白人による黒人に対するリンチは北部州で皆無であったわけではないし、先住民やチカノに対するリンチがあったことも明らかになってきている。

本論では、最近のアメリカにおけるリンチ研究を参照しつつ、リンチの宗教学的課題について取り上げることにする。また、紙面の都合上、本論で取り上げるリンチの歴史的・社会的背景を詳細に論ずることはしない。

本論では、まず、リンチ研究史をマイケル・J・フェイファーの論考によって跡付けてみる。第二に、研究者の間でリンチの時代と呼ばれるリンチが行われた時代と奴隷解放後の新たな奴隷制との相関関係について若干の考察を行う。第三に、リンチの宗教性を以下の諸点において取り上げる。1. リンチとキリスト教会、2. 祝祭儀礼としてのリンチ、3. リンチとセクシュアル神話、4. 見世物としてのリンチの観客。第四に、公共と暴力の観点から、リンチにおける苦痛・苦悩・苦難の主体的経験の回復の可能性について触れてみたい。

II. リンチ研究史

2002年10月にエモリー大学で「アメリカにおけるリンチと人種差別暴力：歴史と遺産」会議が開催された。2014年、このリンチ研究の会議の15周年を前にして、マイケル・J・フェイファーは、その時までのリンチ研究の歴史と動向を振り返った。ここではフェイファーの要点を参照しつつ、アメリカにおける研究動向を見てみたい（Pfeifer 2014：832-846）。

1970年代以降、リンチ研究は新しい展開をしていく。1979年のジャクリーン・D・ホールの *Revolt against Chivalry* は、ジェシー・D・エームズの反リンチ運動を取り上げ、暴力とセクシズムとの結びつきを指摘している。ロバート・ザングランドの1980年の *The NAACP Crusade against Lynching, 1909-1950* は、「全米黒人地位向上協会（NAACP）」にとって反リンチ運動は、リベラル運動派などとの協同を可能とする先端的課題であったことを明らかにしている。1982年のジェームズ・R・マクガバーンの *Anatomy of a Lynching: The Killing of Calude Neal* は、フロリダ州ジャクソンで起きたクロード・ニールのリンチの詳細な社会的背景を取り上げた研究である。1984年のジョエル・ウィリアムソンの *Crucible of Race: Black-White Relations in the American South since Emancipation* は、リンチをより広い文脈に位置づけ、奴隷解放と1890年代の農業不況の後で、性的・経済的自律性を失った南部白人男性が、その補償を求めようとして起こしたのがリンチであるという論を展開した。ウィリアムソンは、白人は白人男性の特権を再肯定するために、「黒人の野獣強姦魔」という神話を作り出し、白人男性が嫉妬しているファンタジー化された黒人の性的力のために黒人を罰したと論じた。民話研究者のトルディア・ハリスは、1984年の *Exorcising Blackness: Historical and Literary Lynching and Burning Rituals* で黒人作家が取り上げたリンチと人種差別暴力について論じた。黒人作家は、白人が「黒人の野獣」を追放し、去勢化しようとした儀礼的暴力を描き出すことによって、黒人社会の共同体が暴力を生き残れるように努めた。

1989年のジョージ・ライトの *Racial Violence in Kentucky 1865-1940: Lynching, Mob Rule, and "Legal Lynching"* と1993年のW・フィズーフ・ブルンデーの *Lynching in the New South: Georgia and Virginia, 1880-1930* は、ともに地域の社会経済と法と政治文化の関係の中でリンチをする群衆とリンチに反対する人々との間の関係を取り上げている。ライトによると、再建の時代はリンチが最も起きやすい時代であったが、黒人たちは共同して自らを守り、白人の暴徒に抵抗していた。ブルンデーは、ある幾つかの行動と態度のパターンが複雑に絡み合い、暴徒の暴力は南部で人種間の抑圧の役割を果たしていたが、その内容、原因、リンチの対象には多様性があったことを指摘している。1992年の *The Promise of the New South: Life after Reconstruction* で、エドワード・L・アイアーは、リンチは主にフロリダからテキサスのメキシコ湾沿いとミシシッピからテキサスの綿農場で起きていたと論じ、それらの場所は、人口密度が低い黒人人口の増加率が高く、政治の力が弱いところで、もはや手に入れられない白人の支配権を改めて獲得しようとする試みであったと論じている。1995年の *A Festival of Violence: An Analysis of Southern Lynching, 1882-1930* で、スチュワート・E・トルネイとE・M・ベックは、綿の低価格とのリンチとの関係を取り上げた。白人社会が政治的競争のために分裂し、白人が黒人労働者が逃避するのを恐れていた

ところでは、リンチが起きる可能性が低かったと論じている。

2002年の*The Many Faces of Judge Lynch*でクリストファー・ワルドレップは、リンチという語の歴史的利用方法の変遷について取り上げ、リンチという語の歴史的に正確な使用について注意を促した。2004年の*Legacies of Lynching*でジョナサン・マルコヴィッツはポピュラー・カルチャーでのリンチの取り上げ方を論じ、リンチの意義は歴史的影響と力と知識の状況との関係において決められると論じている。2004年の*Rough Justice*で、フェイファーはリンチは南部・西部・中西部では起きたが、北東部では起きていなかったことから、犯罪と裁判の制度が変わる中で起きた文化的衝突からリンチは起きたと論じている。法による手続きに基づいて犯罪を裁判するという立場と「荒い正義」に反対する死刑制度を確立しようとする立場との間の文化衝突から起きたのがリンチである。2004年の*The Making of a Lynching Culture*でウィリアム・D・キャリガンは、南北戦争後のテキサス州の白人は「人種的・民族的・政治的少数派」に対する超法規的な暴力という集合的記憶でリンチを正当化していたと論じている。

2006年の*Lynching in the West: 1850-1935*で、ケン・ゴンザレス＝デイは、カリフォルニアで起きたリンチを取り上げ、メキシコ人、ラテン・アメリカ人、先住民もリンチの犠牲になっていたことを指摘し、リンチ研究を黒人の問題に留めるのではなく、西部の暴力の問題にも目を向けるべきであると論じた。2007年の*On the Courthouse Lawn*でシェリリン・イフィルはリンチが起きた場所の共同体にとってリンチは過ぎ去った過去の事件ではないということ、1930年代にメリーランド州イースト・ショアで起きた暴徒のリンチ事件を取り上げている。

2009年の*Southern Horrors*でクリスタル・フェインスターはリンチ反対運動家のアイダ・B・ウェルズと白人のリンチを主張するレベッカ・ラティマ・フェルトンの詳細な比較研究を行った。そして、どちらも黒人女性の強姦、黒人男性のリンチ、白人女性を白人男性の庇護のもとに監禁しようとする白人男性の主張は誤っていると主張している点で共通していると指摘している。白人男性が黒人女性にも白人女性にも敬意を払っていないとし、どちらもリンチを行う白人男性の被害者であるとしている。そして、強姦とリンチを行う男性は同一である場合もあったことを指摘している。2009年のエイミー・ルイス・ウッドの*Lynching and Spectacle*は本論で取り上げるので、ここでは除くことにする。

そして、2012年の*They Left Great Marks on Me*でキダダ・ウィリアムズはリンチを告白した黒人たちの証言を詳細に取り上げ、リンチ研究の焦点の転換を訴えている。ウッドの研究を念頭においているのか、リンチを白人の祝祭暴力として見る視点が広く行き渡っていることの問題点として、黒人がいかに白人の暴力に反対したか、黒人が受けてきた暴力を言葉で訴えたかについて取り上げる必要性を論じている。

フェイファーは今までのリンチ研究では不十分な点を取り上げて、今後の研究の指針についても取り上げているが、ここではその部分は取り上げないこととしたい。

さて、このような研究史の流れの中で、2015年、EJIは、「アメリカにおけるリンチ：人種差別の恐怖に直面する (Lynching in America: Confronting the Legacy of Racial Terror)」を公表した。この報告の主要な点は、下記の八点にある。第1に、1877年から1950年の間に従来考えられてい

た件数以上の人種差別に基づいたリンチが行われており、その数は4,075件に上った。第2に、最もリンチの数が多かったのは、ミシシッピ州、フロリダ州、アーカンソー州、ルイジアナ州である。第3に、リンチの被害者の大部分は、何の罪も犯していないのに殺された。第4に、リンチの恐怖のため、何百万ものアフリカ系アメリカ人（ここはEJIの表記をそのまま使う）が南部を逃れた。第5に、リンチを認め、それについて論じ、取り上げようとする努力が皆無であった。これらの州では白人至上主義の指導者や人種差別を標榜する建物などを記憶しようとしているが、リンチについて触れていない。第6に、恐怖のリンチには以下の要素がある。①人種間の性的関係についての曲解された恐怖に起因している。②ありきたりの社会的な非礼に対してリンチが行われた。③酷い暴力的な犯罪の訴えに基づいている場合があった。④公共的な見世物的なリンチ。⑤アフリカ系アメリカ人の共同体全体に暴力が向けられることとなったリンチもある。⑥1915年から1940年の間に良く起きたことだが、不当な扱いに抵抗した小作農、牧師、指導者らがリンチにあった。第7に、上記の州でリンチの件数が減ったのは、裁判で死刑の判決が増えたためである。死刑判決がリンチの遺産に起因している。第8に、人種差別の恐怖の歴史と人種の不平等の遺産にアメリカは向き合わなくてはならない。

若干繰り返しになるが、EJIが取り上げているリンチとは、犯罪行為として裁判にかけられた暴力行為でもないし、法制度のないフロンティアの正義でもなかった。それは、リンチがしばしば町中の裁判所の中庭で行われていたことからいえる。そして、それは白人の黒人に対する支配を暴力的に誇示する方法でもあった。

「恐怖のリンチは、リンチの行為者である犯罪者が決して理由を説明することのできない悲惨な行為である。実際、幾つかの『公共の場での観劇的なリンチ』には白人社会の全体が参加し、異人種間の関係をコントロールし、支配しようとする祝祭的な行為として行われた。」(EJI 2015 : 4)

このEJIの指摘が指摘している諸点で重要なのは、リンチの被害者は何も罪も犯していなかったし、ありきたりの社会的非礼に対してもリンチが行われたという点、そして、黒人の共同体全体に暴力が向けられていたという点である。これらからいわゆる「白人」が皮膚の色によって人種的他者と意義付けた「黒人」に対して暴力と恐怖を行使する社会文化的存在であると自らをみなしていたことが分かる。

EJIのこのような指摘は、アメリカ社会において黒人が受けている人種差別的な暴力の現状を思い起こさせるものであり、過去と向かい合うことなく、現状の変更は難しいと示唆していると思われる。

以下では、まず、リンチが超法規的な暴力であったとしたら法規的な暴力も横行していたということを、奴隷解放以降の「再奴隷化」という問題点を提議したダグラス・A・ブラックモンの研究を参照しながら、その時代的背景を少し見てみることにしたい。

III. 奴隷解放後の奴隷制とリンチの時代

1862年の奴隷解放宣言以降も「黒人」に対する差別は強く残っていたことは良く知られている。南部におけるジム・クロー法については言うまでもないが、白人は常に黒人に対して、奴隷解放以降も黒人は自由民ではなく、奴隷であり続けていると、執拗に示そうとしていた。そして、それは単に生活の中で示されただけではなく、囚人労働という形で奴隷制を継続しようとしていた。ダグラス・A・ブラックモンが論じているように、丁度この時代は、「別の名前の奴隷制」が行われていた時代であり、まさに「リンチの時代」と重なってくる。ブラックモンが最初に挙げているグリーン・コットンハムの場合を見てみよう (Blackmon 2008 : 3)。

1908年3月30日、コットンハムはアラバマ州シェルビー郡の警察官に「浮浪罪」の罪で逮捕された。常に雇用されていることを証明できなければならない、できなければ「浮浪罪」に当たるという法は、19世紀末にアラバマ州を初めとする南部の諸州で導入された。三日間刑務所に入れられた21歳のコットンハムには有罪の判決が下され、30日間の労働が課された。囚人に課された費用が払えなかったため、コットンハムの労働期間は1年間へと延長された。そして、次の日、コットンハムは郡と北部の大企業U.S. Steel Corporationに売られた。刑期の間、コットンハムは会社のために働き、会社は州にコットンハムに課された金額一か月分12ドルを払った。その数時間後、コットンハムは第12番坑道の地下に連れていかれ、そこで日夜、石炭掘の作業を行った。毎日8トンの石炭を運び出す仕事を課されたのである。それが出来ないときは鞭打ちされた。先に坑道に入れられていた「炭坑夫」から性的虐待を受けたであろう若者が経験したものは、のどかなアラバマ州の田舎で育った少年が考える地獄の様相をはるかに越えたものであったに違いない。北部の巨大企業に雇われた鞭打ちの管理人のもとで黒人が労働を強制されていたのは、名前が違うだけの奴隷制であったと、ブラックモンは指摘している。

以下、当時の状況について知るために、ブラックモンの説明をもう少しみてみよう。

グリーン・コットンハムの話では、アメリカ鉄鋼会社 (U.S. Steel Corporation) が囚人労働を酷使したことになっているが、それは、U.S. Steel Corporationが1901年にTennessee Coal, Iron & Railroadを買収したからである。U.S. Steel Corporationが行ったことは、既にTennessee Coal, Iron & Companyが行ってきたことであった。このTennessee Coal, Iron & Railroadがアラバマ州と囚人を労働に使用する契約をしたのは1888年のことである。そして、1889年には、およそ1,000人の囚人労働者があり、2,000人以上の炭鉱労働者がいたが、その大部分は黒人であった。囚人労働者は石炭を掘り出すだけの健康と能力がどれくらいあるかによって、四階級に分けられていた。「第一級」の囚人は、鞭打ちを避けるために、毎日4トンの石炭を掘り出さなくてはならなかった。「第四級」の囚人は毎日最低1トンの石炭を掘り出さなくてはならなかった。「第一級」の囚人は毎月18.50ドルかかり、「第四級」の囚人は9ドルかかった。しかし、アラバマ州は、年間の収入が100万ドルに届くか届かないかの時に、囚人の借与で年に12万ドルの収入があった (Blackmon 2008 : 95)。

炭坑の囚人労働に酷使された黒人が陥った状況は、ある意味、奴隷制のものと同等か、あるいは

は奴隷制度が終っていたにも拘らずという意味でより悲惨であった。地下の炭鉱の衛生条件は酷かった。ヘッドランプ、ダイナマイトの爆発、メタンの漏れなどにより空気が悪く、食料がほとんどなかっただけでなく、人間の排泄物で汚染された水しか飲み水はなく、多くの人が酷い下痢を起こし、病気になって死亡した。

ブラックモンの研究はアラバマ州での囚人労働に焦点を当てている。アラバマ州はリンチが最も頻繁に行われた12州の一つであるが、その他の州における囚人労働についてはブラックモンの研究ではあまり言及されていないので、一般化することはできない。しかし、両者の間に何らかの相関関係があったことを想定することは可能であろう。むしろ奴隷解放宣言以降の南部における白人の黒人に対する一般的な態度が日常生活における差別や虐待から囚人労働、リンチへと質と程度を変えて表れていったと考えた方がより理解することができる。

炭坑における囚人労働による悲惨な死が多数起きたことは明らかである。公的な企業による炭坑という隠された空間での奴隷的労働とその悲惨な環境における病気や死と、白人の群衆が集う場でのリンチとの間には違いがあったが、制度的であれ、直接的であれ、虐待と暴力が向けられていたのが黒人であるという点においては変わりはなかった。前者には制度的枠組みがあったが、後者にはそれがなかったという違いだけであろう。そして、リンチには、公的処刑と宗教的儀礼を混淆した祝祭的な見世物ショー的要素があったことも大きな違いである。

IV. リンチとキリスト教の関係とリンチの宗教性

1. リンチとキリスト教

リンチと白人至上主義との関係は明白であるが、リンチとキリスト教はどのような関係にあったのだろうか。リンチとキリスト教会との関係は一般化することは難しいが、牧師や教会信者がリンチに積極的に参加した場合もあるし、リンチに反対した牧師、教会信者がいたことも確かである。リンチとキリスト教会との間には、一体、何らかの関係があったといえるのだろうか。

ベイレイとスネドカーは、「説教の実践？ 1890年から1929年までの南部アメリカにおけるリンチと宗教（“Practicing What They Preach? Lynching and Religion in American South, 1890-1929”）」（2011年）で、道徳的共同体を仮想し、連帯を強める役割をキリスト教会が果たしていたという見地から、南部諸州の郡を単位として、キリスト教会内外における人種混交の割合とリンチの件数との相関関係を明らかにした。第1に、デノミネーションという観点からの宗教的多様性が高ければリンチの件数が多くなる、つまり、白人と黒人を含めた総体としての道徳的な連帯よりもデノミネーション上の競合があるところでは、リンチの件数が多い。第2に、黒人が主導する黒人教会に所属する黒人人口の割合が多ければ、白人による人種差別の暴力を受ける割合が高くなった。第三は、人種混合の教会に参加している人数が多ければ、リンチの件数は少なかった。このようにデノミネーションと人種関係とリンチの件数との両者の間に相関関係があったことが認められると論じている。

ベイレイとスノドカーによれば、再建の時代の南部各州では、キリスト教会の社会的力が相対的に弱くなっていったが、白人至上主義とキリスト教を基盤とした道徳共同体の一致を強調する中で、カーニバル的雰囲気の中で黒人を犠牲者としてリンチが行われるようになった。デュルケムに倣って、道徳共同体としての白人社会の連帯を強化するように、白人の黒人に対する優位と黒人共同体に対する白人優位の教義を視覚的・感情的に表象するために、そして、黒人は救いがなく無力な存在であることを示すために、無作為な黒人のリンチが行われた。1899年12月7日発行のThe New York Timesに掲載されたケンタッキー州メイズビルで起きたリンチには2,000人ほどの群衆が集まったが、そのほとんどの白人は顔を隠すこともなく、また、そのほとんどが教会の信者であったという (Harris 1984 : 9)。つまり、教会という場からリンチという場への移行には連続性が強く見られたということである。

ここでのベイレイとスノドカーの指摘の中で重要なのは、カーニバル的雰囲気では暴力が行使されていたこと、その暴力を通して白人至上主義の道徳共同体の幻想がリンチを行った人々だけではなく、それを見に来た人々の間で共有されていたという点である。

ここで一つの問題を取り上げなくてはならない。「宗教」とは日曜日の礼拝の時空間の間のだけのことなのであろうか。おそらく日曜日の礼拝の間はキリスト教の言説と象徴に満ちた儀礼の時空間が現出されていたであろうが、宗教とはそのような限られた時空間に制限されるものではない。確かにデノミネーションなキリスト教という意味での宗教はそうであろうが、リンチの場面で表出し、現出した宗教性は、それとは連続するが異なる宗教性を担っていたと言ってもよい。

リンチが持つ宗教性についてはいくつかの側面から取り上げる必要がある。公共性、儀礼性、カーニバル性、そして、教義的側面である。人がリンチされ、殺されているのに祝祭性を論じるのは、暴力の被害者が経験していたであろう苦痛、恐怖、絶望感を無視した一方的なものであるが、周囲に集まってきた白人にそのような祝祭性があったことは否めないことが、新聞報道などの記事からも伺い知ることができる。

リンチは人目に付かずに行われたものもあるが、群衆の眼前で行われたものもある。ここでは、前者ではなく、後者に焦点を当てることにしたい。というのも、暴力が持つ公共的意義を考察する上では、公共的時空間において暴力が行使されたことが重要であるからである。そして、単に公共的時空間で行われたというだけではなく、白人という社会が集合同としてリンチを是認していたという事実がある。黒人は「誰か知らないものの手によって (At the hands of Persons Unknown)」 (Dray 2003) リンチされ、屈辱を与えられ、苦痛を与えられ、絶望と苦しみの中で死んでいった。

リンチがもつ儀礼性については幾人かの研究者が触れている。トルーディア・ハリスは、黒人作家は自らが生きた歴史において起きた出来事と密接に関わっているという観点から、黒人作家が記述したリンチを歴史リンチと比べながら、リンチに見られる儀礼性を指摘している (Harris 1984)。ハリスは異なる場所で起きたリンチには繰り返される儀礼的な道具と過程が見られるとし、特にロープ、銃、ナイフ、ガソリンなどがリンチの道具の定番となっているという。黒人を

身体的に痛めつけ、傷つけるだけではなく、白人の力の前で虐げさせ、黒人としての罪を告白させ、最後には火をつけるなどして殺す、というある共通の儀礼の過程が見られる。このような儀礼的側面を持つ象徴性について、ドナルド・G・マシューズが論じたリンチの象徴論は重要な示唆を与えてくれている。ここでマシューズの議論を参照してみたい。

マシューズはリンチの背景にある様々な社会・経済・政治的な文脈と要因に加えて、宗教とリンチの関係についても取り上げる必要があると述べている。リンチを行っている白人個人と集団の間には、敬虔さや満足感が感じられる、あるいは象徴としてリンチで殺された黒人がリンチに加わる人々の間に知られずに喚起している恐怖と何かしら不可思議な感じを宗教的感覚とも呼ばると指摘している。それは、社会的支配の力の経験であるとともに、何かしら宗教的な力の経験でもあるという。更に、殺された黒人の遺体の一部や衣服が持ち帰えられたり、写真やイメージが複製され、リンチの現場にいらなかった白人たちに土産として持って帰られるということの意義を指摘している。

マシューズによれば、南部福音主義的なキリスト教では、神の怒りと罪は対極に置かれており、罪の裁きは懲罰として与えられるものであった。そして、キリスト教会での教えを聞き、自らの救済を確信し、白人が黒人よりも優秀であることは当然であると考えていた南部キリスト教信者にとって、懲罰としての「血の供犠」は南部のファンダメンタリストのプロテスタントの中核にある観念であった。リンチは黒人が犯した罪に対する懲罰であり、「血の供犠」であった。リンチにおける神の怒りは、白人至上主義への黒人の違反、黒人が「奴隷状態」、つまり何ものでもない状態から踏み出そうとする造反に向けられた。キリスト教徒の白人にとっては、キリスト教の教えに基づく白人至上主義の道徳共同体は宗教的共同体であり、世俗的共同体でもあった。白人の怒りは神の怒りを表し、黒人に向けられた白人の怒りは神の怒りを体現していた。血の供犠は、白人至上主義という目的の聖性、人種隔離政策で意義づけられた白人共同体の純潔、神の怒りの偉大さ、「正義あるキリスト教徒の怒りのもと、白人の連帯の十字架の上で黒人を供犠に捧げることを認める文化、これらを結びつけるものであった」(Mathews 2000)。

マシューズは、1870年代以降、特に南部でキリスト教会の社会的影響が衰えていたことと、南部では男性・夫・父親という社会的存在を中核として女性・子供を暴力を通じて教育・躾けるということが当然と行われ、同様の文脈で白人が黒人を教育・躾けるということも行われていたというスザンナ・マーシャルの考えを参照しつつ (Marshall 1994)、リンチの社会的文脈にも目を配りながら、キリスト教会の中で抱かれてきた宗教的世界観がいかにリンチという行為の中で実現されていたかを論じている。

マシューズの論は、リンチと南部福音主義的キリスト教会とが無関係どころか非常に密接に結びついていることを示しており、非常に示唆的である。ここでは、キリスト教の教えが本来的に暴力的であるとか人種差別是認のための暴力を承認しているとか、そのような議論を行っているのではない。歴史的現象としてのリンチという暴力行為が持つ複雑で重層的な意味の組み合わせを論じているだけである。この意味では、キリスト教会の中からリンチ反対運動が起きてきたことも忘れることはできない。

2. 祝祭儀礼としてのリンチ

エイミー・L・ウッドは『リンチと見世物：1840年から1940年にかけてのアメリカにおける人種差別的暴力の証言 (*Lynching and Spectacle: Witnessing Racial Violence in America, 1890-1940*)』(2009年)で、公共的な見世物ショー(スペクタクル)としてのリンチという側面を取り上げ、その様々な側面を論じている(Wood 2009)。リンチが行われた場所が街から隠れたところではなく、例えば、教会の裏であったり、裁判所の庭であったりしたことから、リンチを行った群衆は公共的な空間における暴力を意識していたことが分かる。そして、リンチが行われた場所には、屋台が出、人々はポップコーンやジュースを飲み、談笑もしながら、リンチの様子を「観客」として見ていた。この見世物ショーを見に来た「観客」は、視覚的にも聴覚的にもリンチという見世物ショーに参加していた。暴徒の演説、群衆の叫び声、リンチを受ける黒人の罪の告白、そして、リンチの暴力を受けた苦しみのためにあげる叫びや鳴き声などを聞いていた。そして、暴徒は死亡した黒人の遺体を焼却し、その死の臭いをリンチを見に来た人々は嗅いでいたのである。そして、暴徒や観客は、殺された黒人の遺物や遺体の一部をお土産として持って帰ったり、リンチの様子を撮った写真が、リンチの現場に参加できなかった白人たちに購入されたという。ウッドはこのように視覚的なリンチのイメージが固定化され、再現化されたのには写真や映画などのメディア技術の発展があったことを指摘している。

ウッドは、リンチが行われるようになった歴史的背景にアメリカ社会が急速に都市化と近代化が進展していく中で、ジム・クロー法などがあっても拘らず、南部州の白人の政治的・経済的状況が不安定化していたことを指摘している。その上で、社会が近代化していく中で、近代化しなかった南部の人々が人種隔離政策の推進と白人優位主義の白人共同体の結束を高めるためにリンチに関わるようになったという。マシューズが指摘したように、黒人を隔離することによって汚れと負の記号を負わせ、それに対して白人の道徳共同体を守ることが重要となった。特に、黒人によって白人の女性が性的に侵害されたという象徴的な汚れ(実際に起きたかどうかはここでは取り上げない)を象徴的に清める、罰するという側面があった。

そして、重要な点は、ウッドが指摘するように、リンチが儀礼的に執り行われた、という点である。それは公開処刑とキリスト教会の宗教的儀礼とが混淆したかのような象徴的儀礼であった。

ここで言うキリスト教会の宗教的儀礼というのは、カトリックや聖公会のように教義的に儀礼が重要であるとして執り行われてという意味ではない。南部の福音主義的なプロテスタント教会では、儀礼は教義的には重要ではなかったが、実際の信仰生活においては重要な役割を果たしていた。しかも、それは公共的な意味合いを持っていたという。以下、しばらくウッドの研究を参照することにする。

ウッドによれば、リンチは福音主義的教会の儀礼に類似した形式を取って行われた(Wood 2009: 61)。リンチは単に白人至上主義の道徳的共同体の結束を固める以上のことを行っていた。白人至上主義は善であり、神聖なものであると公的に宣言し、個々の白人がそれに献身するような見世物としてリンチは構築されていた。1885年に起きたミシシッピ州オックスフォード

でのハリス・タンスタルのリンチでは、宗教的儀礼を意識的に真似し、リンチによる暴力には神の承認があるとさえ示した。1897年に起きたケンタッキー州ホーバースヴィルでのレイモンド・ブッシュロッドのリンチは、リバイバルが起きている日曜日に、教会から4ブロックしか離れていないところで行われた。そして、群衆は黒人に跪き、罪を告白させ、長い祈りの言葉を言わせた。このような罪の告白は公的な処刑においても行われた手続であり、リンチはそのような公的な形式を踏襲したといえる。しかし、リンチにおける罪の告白は法廷な意味合い以上に宗教的意味合いを持っていた。

罪の告白は罰を受けること、そして、神に許しを請うことへと繋がるはずであったが、しかしながら、白人のキリスト教的世界観において、黒人は罪の告白と神の許しを請い願っても救われるとは受け止められていなかった。というのも、黒人の犯罪人は堕落した者であり、悪魔であったからである。黒人が白人に対して犯した罪は、白人社会にとっては神の聖なる規律を侵害することに等しく、リンチは神の怒りの現れであり、リンチを行う群衆は神の怒りの代弁者であり、執行者であった。だが、ここで忘れてはならないのは、黒人もキリスト教徒であった、という点である。しかし、リンチを行う白人のキリスト教徒にとっては黒人がキリスト教徒であるかどうかは全く問題ではなかった。キリスト教徒であっても黒人である限りは人間以下の存在でしかない、というのが白人キリスト教徒の見解であった。

しかし、ここで重要な点は、白人社会にとっての罪を犯した黒人に懲罰を与えるだけでは十分ではなかった。リンチは白人の群衆に見られなくてはならなかった。リンチを見る観客としての白人の群衆は、長い間、リンチを受ける黒人の肉体的・精神的苦痛を見、聞くことを要求した。1919年にミシシッピ州ヴィックスバーグでリンチされたロイド・クレイを銃で殺そうとしたところ、群衆はゆっくり死なせろと要求した。1912年にリンチを受けたダン・ディビスが群衆に、もしキリスト教徒なら憐れみをかけて直ぐに殺してくれるようにと懇願したが、誰も応じなかった。火がつけられ、ディビスは神に憐れみを願うしかなかった。このような白人の観衆としての群衆に、サディスティックな嗜好があったというだけでは十分ではないであろう。ウッドによれば、リンチの暴力の犠牲者の苦痛と苦悩を行い、見に来ている白人群衆は、リンチが道徳的・宗教的優越性を感じる機会ともなっている。つまり、黒人に対する暴力を通じて力を誇示し、感じる機会となっていた。リンチを受ける黒人の身体は白人群衆の力を表出するシンボルへと変容されていたといえる。もしリンチが儀礼的要素を持っていたとするならば、暴力を受け、身体を傷つけられ、壊されている黒人の身体は白人にとっては、白人の身体とは峻別され、区別され、白人の生のある身体と対比される死を表す身体となることによって、リンチの儀礼を実行し、見世物として見ている白人にとっては、白人至上主義を「聖化」し、白人を神の救済を受ける人間へと感情的に承認する過程でもあったといえる。このような過程はリンチの現場にいた白人群衆には留まらない。ウッドによれば、新聞などでのリンチの様子の記事を読んだ白人は、罪の告白をし、罰（神による罰）を受け、苦しみの中で死んだ堕落した黒人とは対照的な自分自身の宗教的な高尚さを感じとることができた。

3. リンチとセクシュアル神話

リンチにはキリスト教的な背景だけでは十分には説明しきれない側面がある。というのも、白人による黒人男性のリンチには、ハリスによれば、複数の性的ファンタジーが複雑に絡み合っていたからだという。

黒人をリンチすることを通して達成しようとした白人優位主義には、白人の黒人男性についての性的ファンタジーがあると指摘する研究が多々ある。まず、リンチが行われた理由として挙げられるのに、黒人による白人の殺人と黒人男性による白人女性の強姦（黒人男性と白人女性との姦通）がある。後者は通常、強姦（レイプ）として表現されていないので、実際に性的な関係が起きたのか、あるいは単なる噂でしかなかったのかは不明な場合が多い。また、実際に性的関係が起きたにせよ、強制的なものか、あるいは何かしらの合意があったのかも不明である。いずれによせ、白人男性にとって黒人男性が白人女性と性的関係を持つことは、白人男性の男性性を中心とした白人優位主義を蔑ろにする汚れた行為であると見なされた。奴隷制の時代には白人男性（奴隷主人）が黒人女性と性的な関係を自由に持つことは当たり前であったが、同様の、しかも反転した関係、つまり黒人男性が白人女性と性的な関係を持つ、あるいは楽しむというのは白人男性にとっては許されざる行為であり、白人女性を黒人男性から守るという神話を作り出すことによって白人男性の性的誇りを守ることができた（Harris 1984 : 16）。

マツイによれば、南部の女性神話では、白人女性は純潔を象徴し、体現しており、性欲を持つことは白人女性にとっては不自然なことであるとされた。（Matsui 2013 : 3）白人女性が性欲を持つのは白人の家族を持つためにであり、それゆえ、白人社会の優越性に正当化を与える核心的象徴でもあった。それに対して、黒人女性は性欲のある汚れたものであり、白人女性の対極にあるとされた。そして、セクシュアリティは黒とされていた。

ハリスによれば、社会的な側面から言えば、白人男性の役割は白人女性が妻、母として中心にいる家庭を守る役割を果たしており、白人男性の奴隷主人が黒人女性と性的関係を持つことは、心理的にも身体的にも白人の人種の優位性を示すものとされた（Harris 1984）。ところで、白人男性が女性と性的な関係を持つことは、身体的な関係だけではなく感情的な関係も持つことである。それゆえ、もし黒人男性が白人女性と何らかの性的な関係を持つということは、白人男性が持とうとした白人女性に対する力が否定されることを意味し、白人男性が幻想的に保持しようとした白人男性の優位性が損なわれることでもあった。白人男性が個人で感じる力の無さは、リンチにおいてその無力さを補てんするかのような群衆対一個人、そして、銃、ロープ、ナイフと言った道具対生身の黒人という非対称的な関係性に見て取ることができる。

ウィンスロップ・ジョルダンは次のように述べている（Jordan 1968 : 151-152）。南部白人文化に根づく性的に攻撃的な黒人というイメージは非合理の深みに根差している。白人男性が自分自身の欲望を黒人に投影していたのは明らかである。白人男性が黒人女性を性的に求めていることは社会においても自身においても受け入れられないし、認められない。それゆえ、そのような性的欲望は否定され、それに伴う不安感や罪悪感是他者に転嫁される。欲望を持つのは我々ではなく、他者であり、罪があるのは我々ではなく、他者である。リンチにおいて、黒人にこのような

白人の罪の意識を転嫁させ、自らを罪から解放しようとしていたともいえる。黒人の男性は性器を切り取られ、拷問を受け、焼かれ、刻まれた。

このような性的なファンタジーを背景として、リンチにおいて公衆の面前で黒人男性の男性性器が曝け出され、切り取るという象徴的な行為が行われた。それは、白人女性を性的に汚し、白人男性の性的力と優位を貶めたことへの報復と罰ともいえる。だが、ハリスによれば、そのような性的リンチの背景には、別の種類の男性の性的力に関する植民地時代に由来する性的神話があるという。それは、白人男性が黒人男性の性的な力と男性性器の大きさに対して持つ不安と嫉妬、競争心にあるという¹。この最後の競争心は、リンチで黒人男性の性器の切除という形で具体化される。それは、リリアン・スミスが南部の社会的・性的道徳について書いているように、リンチされた黒人は死ななければならないものとなったのではなく、あらゆる男性が持つ憎しみを受け入れる器となり、あらゆる男性が持つ禁じられた性的感情を受け入れる器となることであった (Harris 1984 : 23 ; Smith 1978 : 162)。

ウッドが指摘しているように、リンチで殺した黒人男性から切り取った性器を土産として持ち帰った白人男性がいたことは、一層、複雑な意味合いを持たしている (Wood 2009 : 99)。戦いをし合っている敵を殺し、相手の心臓を食べたりするのは、敬意を表し、恐怖を感じている敵の力を自分のものとするためであるが、同様の心理的作用がこの南部の白人にも見て取れるとウッドはいう。その意味では、リンチで殺した黒人の身体の一部に何かしらの呪術的な力を認め、それを自分自身も身に着けようという、ある意味では、キリスト教的ではない宗教的な意識が作用していたのともいえる。それは、例えば、今日ではもう行われなくなっているが、首狩り族の男性が殺した敵の首を持ち帰り、乾燥させて持ち歩いていたという振る舞いと近いものを感じることができる。

4. 祝祭としてのリンチの観客

ウッドを始め多くの研究者が指摘しているリンチの重要な構成要素の一つが見世物としてリンチを見に来た白人の群衆の存在である。この観客には幾つかの層がある。一つはリンチの現場に集まってきた人々である。もう一つは新聞や写真などを通じて、リンチが描かれた記事を読んだり、リンチの様子を写した写真を見、所有した白人である。

リンチの現場に集まり、リンチを見ていたのは白人の男性だけではなく、女性や子供もいたことは良く知られている。リンチに集まる群衆目当ての食べ物屋なども出されていたという。つまり、リンチの現場にポップコーンや食べ物を食べながらリンチの様子を見ていたのである。それ

1 ハリスは黒人男性の性的力についての民話を挙げている。「白人、黒人、メキシコ人の三人の男が裁判所に送られた。裁判所で判事は次のように言った。『お前たちの間にあるものの長さが15インチあったら、放免する。』判事は廷吏を呼び、性器の長さを測らせた。黒人のものを測ったら7.5インチあった。次にメキシコ人のものを測ったら5.5インチあった。最後に白人のものを測ったら2インチあった。合計で15インチであった。そして、三人は放免された。裁判所の外に出て、三人は笑いはじめ、自慢し始めた。黒人は『良かったな、俺のが7.5インチあって。』と言った。メキシコ人は『良かったな、俺のが5.5インチあって。』と言った。白人は二人を見て、『二人とも良かったな、俺のは勃起していたんだ。』と言った。」 (Harris 1984 : 21)。

は白人にとっては黒人をリンチするということがあたかも当然の日常性の一部であることを示す象徴性を担った行為であるともいえる。それはまたリンチを受けている黒人を「非人間化」し、人間以下の存在へと無化しようとする、意識的であり無意識的な行為であったと言える。直接暴力を振るっているのではないが、まさにこのような振る舞いを通じて、リンチを受けている黒人にメッセージを送っていたといえる。

そして、リンチの現場に女性や子供がいたということは、どのように解釈すればよいのであろうか。現在のアメリカ社会のように子供に残酷な映像を見せてはいけないというような立場からは、若干、信じられないようにも思える。しかし、白人の子供たちにとっては、大人の白人の世界観を上演しているかのようなリンチの場は、白人と黒人の関係を知的にはではなく、大人の白人群衆との連帯感を感じながら、リンチを受けている黒人の苦しみ、嘆き、泣き声、死の叫びなどを視覚、聴覚、嗅覚、味覚などの五感を通じて、白人至上主義を身体化していく儀礼の過程ともなっていたといえる。

このことを示す象徴的な写真がある。リンチで殺された黒人が木の枝から吊り下げられているのを白人の大人とともに子供が見ている。大人たちは神妙な顔つきで見ているが、子供たちは殺された黒人を見上げながら、笑顔を作り、大人の白人（父親であろうか）に何か話しかけようとしている様子が写されている。もし、リンチされ、殺された黒人が写っていなければ、単に無邪気な笑顔としてしか思えないような笑い顔を向けている。この子供の目にはリンチされ殺された黒人が木の枝から吊り下がっている姿が焼き付けられ、意識のレベルではなく、無意識のレベルに強いイメージとして残ることとなる。黒人は白人の暴力を受ける存在として、白人の子供の心に強く残ることになる。

白人の女性に関しては、リンチの大きな理由の一つが黒人による白人女性に対する強姦あるいは強制的な性的な関係であったことから分かるように、リンチの現場が白人の女性の怒りと恐怖の発露の場となっていたことは想像に難くない。

黒人も見に来ていたとされるが、黒人のリンチを目にした黒人が感じることは白人のそれとは正反対であり、異なっていた。白人の群衆はある黒人がリンチを受ける様子を黒人が見ることによって、教訓を教え込ませられると思っていた。白人至上主義と人種隔離、白人の価値を蔑ろにした黒人が受ける罰はどのようなものとなるのかを、リンチを受ける黒人と同一視することによって、その苦痛、恐怖を感じさせられる。苦しみの声、救いの嘆願の声、嘆きの声、死の断末魔の叫び、死体を焼く臭い、これらは全てが五感を通じて黒人に自分は何ものであるかの知らしめる強力な象徴作用があった。

そして、リンチの悪名を高めたのは、ウッドが指摘するように、リンチの場面を映した写真である。それゆえ、新聞と写真機という近代を特徴付ける情報伝達の媒体の存在は、リンチを新しい社会的次元にもたらすこととなった。

例えば、最初の「近代的」なリンチと呼ばれるヘンリー・スミスのリンチ場合を見てみよう。1893年、テキサス州パリで三歳の少女を性的に虐待し、殺した後、ヘンリー・スミスは逃亡した。直ぐにスミスを捕まえるための追っ手が派遣された。追っ手がスミスを捕らえて街に戻って

くるというしらせを伝え聞いた人々は、スミスの運命を目撃するために学校を休校にし、仕事を休みにし、駅に集まってきた。そして、近隣の町・郡からだけではなく、ダラスやアーカンソーからも汽車や馬でやってくる人もいた。そして、重要なのは、リンチの場面が写真に撮影され、それが後にはアメリカ全土で売られるようになった、ということである。

ウッドによれば、これらの写真が示しているのは、南部の白人群衆が黒人のリンチと死を見に集まり、しかもその公共的な暴力の場面を当然のごとく受け入れていた、ということであるという。と同時に、写真に添えられた説明は罪を犯した悪魔が、正義のもとに団結した白人の集まりによってその罪の報いを受けている、というキリスト教的な背景を持って正当化されていることが分かる。しばしばリンチの雰囲気には宗教的な敬虔さが感じられた、という証言がなされているが、記事や写真では、そのような雰囲気（南部の白人ならば分かる雰囲気）が人には共感的に理解されたのではないかと思われる。少なくとも一人の人間の死を良心の呵責も感じることもなく見ていたのかも知れないが、死において初めて黒人の人間性を承認せざる得ないということが感じられたとも思われる。

だが、写真にはそれだけではない側面がある。リンチの暴力を受けた黒人の身体を写した写真は売られ、白人に所有され、自宅に置かれていたということから、奴隷制の時と同様に黒人の身体は物として物品化され、商品として取引されたことが分かる。生きた黒人の身体だけではなく、死んだ身体をも物品化し、商品化せざるを得ない南部白人のキリスト教文化というものは、いかなる意味の宗教であったのか、という問題を突き付けるものである。

V. リンチにおける黒人の身体を通歴史的公共性

リンチという暴力を振るった白人にとって宗教的意味合いがその行為とその周辺にあったことは、ここまでの考察で明らかになった。しかしながら、リンチという社会的・宗教的現象の中心にはリンチを受け、苦難と苦しみの中で死んだ黒人がいる。リンチを宗教現象として捉えた時に、リンチを受けた黒人のリンチの経験の意味をいかなる意味で解釈できるのか、という問題を問うことは宗教学にとって重要である。ギアツのように宗教的象徴を行為と行為者の感情に焦点を当てた場合 (Geertz 1973)、リンチを行い、扇動した側の記録、行為、イデオロギー等は歴史的な事象としてのリンチの宗教的意味の再構成と解釈の基礎となりえるが、リンチという行為を受けた被害者である黒人にとっての宗教的意味は消去されてしまう。暴力を受け、死んだ黒人には意味ある行為はない。苦痛と苦悩と苦難の経験と死があるだけである。人間的意味の次元を行為や意志において見出そうとする現在の宗教研究の理論と方法においては、少なくともそのような苦痛と苦悩と苦難の経験を解釈し、意味あるものとする視点はあまりない。このような問いかけは現在までの宗教学研究の限界を明らかにするものであり、公共の時空間におけるリンチ死の意味をどのように解釈できるのか、という問題を突き付けるものである。しかし、リンチの時空間は、社会的に正当化された制度のもとでの公共性とは相反する特徴を持つものであり、それに公共という概念を当てはめることには疑義が投げかけられると思うが、公的な空間（裁判所の中

庭等)が選ばれたのは、リンチを行う白人たちが逸脱しながらもその公的な正当性を主張しようとしていたからではないかと思われる。あるいは、社会的な承認を受けるのを当然視していたともいえる。

経験科学的な宗教学の方法論的・理論的な枠組みの中では、リンチにおける死という資料的にも解釈的にも近づくことのできない経験の領域についての問いを立てるは、学問の境界を逸脱するものとされる。しかしながら、主体性の経験的意味を明らかにするという観点からするならば、主体性を否定され、無視されたリンチにおける死の経験の意味の解釈の可能性を問わなくては、リンチと暴力の宗教的意味の考察は不十分なままであろう。しかし、資料的にはリンチで殺されてしまった黒人の経験を直接的に表明した記録はない。それゆえ、別の方策を考える必要がある。まず、リンチや黒人に対する日常的な白人による暴力に対して、黒人社会はどのように反応をしたのであろうか、というところから見てみたいと思う。白人至上主義の白人群衆が意図したように、リンチにあう黒人の姿を見せることによって、解放された黒人たちは黙って白人のいうことを聞こうと思ったのであろうか。

リンチで殺されてしまった黒人の証言は得ることはできないが、白人の暴力を受けた黒人の人たちが訴えた証言は数多く残されていることがキダダ・E・ウィリアムズの研究で明らかになっている(Williams 2012)。それは、白人の暴力の被害を受けた黒人たちが「解放民」局に訴えた内容や議会での証言であった。その内容から、ウィリアムズは奴隷解放後、黒人たちがどのような生活を達成しようとしていたかが分かるという。

「(例えば)一度、黒人が家族、住居、仕事を手に入れることが出来たら、男女関係を公式なものにし、奴隷制と戦争で別れ別れになった家族を取り戻し、独立した住居を建て、雇用を見つけ、可能ならば、土地を手に入れようとした。市民としての生活をし、暴力に耐え、暴力の費用を計算し、正義を手に入れ、人生を再建しようとしたというのが、議会での証言に共通したテーマであった。更に被害者と目撃者の証言から次のことが分かる。選挙活動への参加と土地の所有が甚大な暴力の理由になったが、再建の時代の進歩的改革のもとでの黒人の社会的上昇を黒人が享受したために、白人が仕掛ける暴力に耐えなくなってきた。」(Williams 2012 : 36)

ここで描かれているのは、黒人が置かれた歴史的矛盾の状況である。一方では、奴隷解放宣言以降、アメリカ国民として普通の市民生活を求め、実現しようとしながら、他方では、奴隷制時代のメンタリティをそのまま保持し、新しい歴史的状況を受け入れられない白人層からの暴力を受けるという社会的状況である。奴隷制時代に分断された家族を取り戻し、普通の男女として家族を持つという日常性が、そのまさに普通の日常性のゆえに白人の暴力の対象となっていた。

ここで白人と黒人を峻別し、区別した指標は何であったのか、という点を思い起こしてみた。それは言語でもなく、宗教でもなく、ジェンダーでもなく、皮膚の「色」の差異だけであった。黒人にとってはこの皮膚の「色」が恐怖をもたらす理由でありながら、皮膚の「色」は生来

の所与のものであり、選択できるものではなかった。後に、マルコムXが「ブラック・イズ・ビューティフル」と言った時、この皮膚の「色」の価値が恐怖をもたらすものから美しく強いものへと変えられたが、それは黒人の皮膚の色に与えられた意味が逆転したのである。

普通の生活を求めようとする日常性と皮膚の色の差異のゆえに黒人が白人によって暴力を振るわれるという恐怖の歴史的経験は、それ自体は近代的な歴史的経験の一部であったと言ってもよい。しかも、アイロニーは奴隷解放宣言というアメリカ合衆国憲法の理念を実現しようとする中で起きた恐怖の歴史的経験であったという点である。言い換えれば、合衆国憲法とは別の社会的理念の力、かつてはあったが今や失われてしまった白人優越主義とキリスト教が混在した白人優位の社会という記憶を再現化しようとする白人群衆が、その経済的・社会的背景があったとしても、群衆としての白人が個人の黒人に集団的暴力を行使したという構造が見られる。そして、リンチされ、苦痛と苦しみの中で死んだ黒人は、EJIの報告書が発掘しようとしているように、個人名が明らかになるが、暴力を行使したのは誰か不明である (at the hands of persons unknown)。今日、リンチという歴史的出来事を振り返った時、意味があるのは殺された黒人の人生であり、暴力を行使した白人の人生ではないということは、ある一つの解釈の可能性を示している。白人優越主義とキリスト教による救済という歴史にとらわれた白人が起こした恐怖のリンチは、エリアーデが論じたような宇宙論的な宗教的世界によって克服できるものではなかったのではないだろうか (Eliade 1967)。しかも、公的な裁判による処刑の形式と教会での儀礼の過程を模していたリンチが持つ暴力の儀礼は、ジョナサン・Z・スミスが論ずるような儀礼行為が持つ分類の視点では、その意味の解釈は不可能である (Smith 1982)。もし、リンチによって苦痛を与えられ、苦しみ、苦難の中で死んだ黒人の身体と魂に何らかの意味があったとするならば、それ自身において何らかの解釈の可能性を要求する種類のものであるといえる。

死についての宗教学的な研究は幾つかあるが、そのほとんどはリンチによる死が持つであろう宗教的意味については触れていない。そもそも従来の宗教研究では、リンチを宗教現象として捉えるという視点が欠けていたのであるから、白人優越主義と人種差別に起因するリンチによる暴力的な死が、その考察の対象とはなりえていなかった。しかしながら、本論でのここまでの議論で、そこには極めて宗教的な意義が認められることから、考察の対象とすることには異論はないと考えられる。

ここで一つ着目したいのが、リンチを受けた黒人の身体の公共性である。個人の身体であり、リンチを受けた苦痛、苦悩、嘆きは個人的経験の極みであるが、それは同時に極めて公共性を伴った「皮膚の色」という差異の意義を与えられた身体であった。

さて、ここでいう「公共」の意味について若干述べておく必要がある。というのも、リンチによって殺される黒人の身体に関わる公共性とは、従来、アメリカ宗教研究で取り上げられている市民宗教論の延長での公共宗教論の問題とは異なる質と次元とを持っているからである。ここまでの議論で明らかのように、リンチを行った白人社会とキリスト教会、そして裁判という法的組織の相関が、一般にいう意味でのアメリカ社会の公共を形成していたが、「黒人」がその公共の担い手、あるいは一部であったということとはできない。むしろ、ここでは、そのような白人が担

い手であったアメリカ社会の公共性が持っていた暴力性、ブラックモンが指摘したような、文字通り黒人を囚人労働者として地下に追いやっていた白人社会の暴力性が、社会制度の枠外で、白人の身体的行為としての直接的な暴力が黒人の身体にむき出しの形で向けられた時に黒人の身体が担うことになった公共性を示している。逆説的だが、白人社会が隠蔽しようとした黒人の存在を公共の時空間で最も見える形で示したのもリンチの暴力であり、それは同時に白人の社会制度が是認している価値と制度を承認するものであった。

さて、リンチの公共的な時空間に現れる非対称的な構造について何点か挙げてみたい。まず、社会的なレベルでは、個（黒人）と群衆（白人）、個人性（黒人）と匿名性（白人）、次に、身体的・感情的レベルでは、苦痛・絶望（黒人）と興奮・優越感（白人）、見られる者（黒人）と見る者（白人）、そして、時間論的レベルでは、死（黒人）と生（白人）、社会的抹殺（黒人）と社会への回帰（白人）といった非対称性を見て取ることができる。そして、通常の同時代的な意味において、この非対称性の後者が意味あるものとされ、前者は無意味化されたものとされる。つまり、公共的な時空間で黒人の存在自体が恣意的な白人の暴力によって無意味なものとして宣言しようとするのがリンチの暴力であったといえる。多くの黒人が南部から北部へ逃れたことが、ある意味では、リンチを行った白人たちの意図が正しく伝わったことの証左であるともいえる。

他方、リンチを行った白人たちの意図とは異なり、リンチで殺された黒人の身体は別の意味を担う象徴性を持つことになる。それは、ピリー・ホリディの「奇妙な果実（Strange Fruits）」で歌われる悲しみと苦痛の感情の芸術的発露を生み出しただけではなく、エンメット・ティルのリンチ死がやがて公民権運動へと続いていったように、リンチを行った白人たちの自己正当化とは異なり、白人たちの不正義、キリスト教的教義の無意味化、合衆国憲法の理念の否定を象徴するようになっていく。別の言い方をすれば、それはリンチの暴力と恐怖を受けた黒人の身体が個別の歴史特殊性・身体的制約性を超えて、正義とキリスト教的教義と合衆国憲法の理念を実践的に実現することを公共的に要求する通時的な内に秘めた象徴となっていったといえる。

VI. 結び

本論では、奴隷解放宣言以降、新たな形を取った白人の黒人に対する暴力の一つの極限の形式としてのリンチを、その公共的かつ宗教的意味合いを探るために、取り上げた。最初に1980年代以降のリンチ研究の動向を、アメリカのリンチ研究者のフェイファーが行った研究史の回顧を参照しながら、今日までの研究動向を振り返ってみた。第二章では、リンチが行われていた時代が別の名前の新たな奴隷制の時代でもあったというブラックモンの研究を参考にした。特に、アーカンソーでの囚人奴隷の扱いを取り上げた。そして、第三章では、リンチの問題を四つの観点から取り上げた。第一に、リンチとキリスト教の関係について、第二に、祝祭としてのリンチについて、第三に、リンチを行った白人男性たちが抱いたセクシュアリティ神話とリンチの暴力との関係について、それぞれ取り上げてみた。第四に、リンチの現場にはリンチが行われるのを見ていた観客がいたことが従来から指摘されてきており、このリンチの苦痛、苦難、死の恐怖の

場面などを楽しみながら見ていた祝祭としてのリンチの観客の白人群衆について取り上げた。第四章では、リンチを含め、白人から理不尽な暴力を振るわれてきた黒人の苦痛、苦難、嘆きの死の意味の公共性について目を向けてみた。そこで、リンチ死の黒人の身体は、暴力を振るった白人の意図とは異なり、却ってそれを否定する象徴的力を持つものとなっていたという通時的公共性について取り上げた。

本論では、しかしながら、リンチの暴力と死を象徴と行為の理論からだけでは辿りつけないリンチの苦痛と苦悩のもとで死んだ黒人の経験の意味を探究することの意義を指摘するだけに留まってしまっている。行為という観点からするならば、リンチの主体は白人群衆であるのは確かであるが、リンチという暴力の歴史宗教的問題の主体は、そのような暴力を受動的に耐えざるを得なかった黒人であったことは確かである。しかし、このような課題を設定することは、従来の理論と方法の枠組みを越える問題を想定することであり容易には受け入れ難いかもしれない。しかしながら、この問いに応えられる理論的枠組を構築することなく、リンチによる死の意義の探究は未解決のまま残ってしまうだろう。

参考文献

- 藤本龍児 2009 『アメリカの公共宗教 多元社会における精神性』 NTT出版。
- Bailey, Amy Kate and Snedker, Karen A. "Practicing What They Preach? Lynching and Religion in the American South, 1890-1920," *AJS*. 2011 November; 117) 3: NIH Public Access
- Casanova, Jose. 1994 *Public Religions in the Modern World*. Chicago, The University of Chicago Press.
- Cone, James H. 2013 *The Cross and the Lynching Tree*. New York, Orbis Books.
- Cook, Lisa 2011 "Converging to a National Lynching Database: Recent Development" Michigan State University: 1-23.
- Cutler, James Elbert 1905 *Lynch-Law: An Investigation into the History of Lynching in the United States*. New York and London, Longmans, Green, and Co.
- Dray, Philip 2003 *At the Hands of Person Unknown: The Lynching of Black America*. New York, The Modern Library.
- Eliade, Mircea 1971 *The Myth of the Eternal Return, or Cosmos and History*. New Jersey, Princeton University Press.
- Equal Justice Initiative 2015 *Lynching in America: Confronting the Legacy of Racial Terror*. 2nd Edition Report Summary.
- Geertz, Clifford 1973 *The Interpretation of Culture: Selected Essays*. Basic Books.
- Hall, Jacquelyn Dowd 1993 *Revolt Against Chivalry: Jessie Daniel Ames and the Women's Campaign Against Lynching*, revised edition. New York, Columbia University Press.
- Harris, Trudier 1984 *Exorcising Blackness: Historical and Literary Lynching and Burning Rituals*. Bloomington, Indiana University Press.

- Jordan, Winthrop D. 1968 *White over Black: American Attitudes toward the Negro, 1550-1812*. Baltimore, Penguin Books.
- Kimura, Takeshi 2015 "James H. Cone's Black Theology of Liberation as Post-Modern Public Philosophy" *The Journal of American and Canadian Studies* no. 33, pp. 3-30.
- Long, Charles H. 1986 *Significations: Signs, Symbols, and Images in the Interpretation of Religion*. Philadelphia, Fortress Press.
- Marshall, Suzanne 1994 *Violence in the Black Patch of Kentucky and Tennessee*. Columbia, University of Missouri Press.
- Mathews, Donald G. 2000 "The Southern Rite of Human Sacrifice," *Journal of Southern Religion* 3 [online] Available at: <http://jsr.fsu.edu/Volume3/Front3.html> [Accessed 22 Feb. 2017]
- Pfeifer, Michael J. 2014 "At the Hands of Parties Unknown? The State of the Field of Lynching Scholarship," *Journal of American History* 101 (3), pp.832-846.
- Matsui, Miho 2013 *Passing into the Darkness: Sexuality, Race, and Integration of the Segregated in the Works of the Southern Renaissance*, Doctoral Dissertation, Hokkaido University.
- Smith, Jonathan Z. 1988 *Imagining Religion: From Babylon to Jonestown*. Chicago and London, University of Chicago Press.
- Smith, Lillian 1978 *Killers of the Dream*, revised and enlarged. New York and London, W. W. Norton & Company.
- West, Cornel 2001 *Race Matters*. New York, Vintage Books.
- Williams, Kidada E. 2012 *They Left Great Marks on Me: African American Testimonies of Racial Violence from Emancipation to World War I*. New York and London, New York University Press.
- Williamson, Joel 1984 *The Crucible of Race: Black-White Relations in the American South since Emancipation*. New York and Oxford, Oxford University Press.
- Wilmore, Gayraud S. 1992 *Black Religion and Black Radicalism: An Interpretation of the Religious History of Afro-American People*. New York, Orbis Books.
- Wood, Amy Louise 2009 *Lynching and Spectacle: Witnessing Racial Violence in America, 1890-1940*. Chapel Hill, University of North Carolina Press.